京都大学	博士(文学)	氏名	坂　内　千　里
論文題目	『説文解字繫傳』考 —經部の書の引用から見た徐鍇の注釋—		

（論文内容の要旨）

本研究は『説文解字』（以下、『説文』と称する）研究上重要な意味を持つ南唐徐鍇の著わした『説文解字繫伝』（以下、小徐本と称する）を再評価するために、特にその注釈の方法・特徴を明らかにしようとしたものである。

小徐本は『説文』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。宋代には非常に尊重されていたが、清代には酷評されるようになり、それ以降ほとんど研究対象として取り上げられていない。小徐本には、多くの書物が引用されているが、その引用に関する評価が宋代と清代では全く異なっており、それが小徐本そのものの評価を左右しているのではないかと考えられる。そこで本研究では、書物の引用に焦点を絞り、その分析を通して小徐本の注釈の特徴について考察した。考察に際しては、小徐の注釈の全体的な傾向をより明確にするために、『説文』研究の最高峰とされる段玉裁注(以下、段注と称する）と適宜比較検討した。

研究対象は、特に引用数の多い五経（九経）の引用に、経部の書物のうちある程度まとまった引用数のある『爾雅』・『論語』の引用を加えたものとし、『説文』と同じ小学類の書物をどのように扱っているかについても併せて検討した。また、小徐本全四十巻のうち、許書の説解を解釈した「通釈」篇から本来闕巻であった巻二五及び叙を除く、巻一から巻二四、及び巻二六から巻二八の計二十七巻を分析対象とした。なお、本研究で「引用」とするものには、厳密な意味での引用のほか、当該書に関する言及も含めている。

本研究は、序章・終章を含め全十二章から成る。序章では研究目的・方法及び小徐の生涯について述べ、第一章では、『爾雅』の引用の分析を通して書物引用の全体的な傾向及び考察の中心となる点を明らかにした。第二章では、本研究に於ける「引用」の取り扱い上の原則を明確にし、それに基づき各経書の引用について研究対象とするもの及びその総数を示した。第三章では、許叙の「其偁易孟氏、書孔氏、詩毛氏、礼周官、春秋左氏、論語、孝経、皆古文也」について「礼周官」の解釈を中心に論じた。第四章から第八章までは、それぞれ『書』・『易』・『論語』・『詩』・『春秋』の引用について、その特徴を考察した。その考察結果に基づき、第九章では小学類の書物の引用について「字書」の引用を中心に考察し、更に第十章では、個別の書物の引用についての考察に基づき、引用の目的・呼称・経書の注釈の引用などの諸点から小徐の注釈の特徴を論じた。

以下、序章・終章及び第二章を除く各章の論旨を要約する。

第一章では、『爾雅』の引用について検討し、その特徴について論じた。『爾雅』は草木鳥獣など具体的な事物の名を説く際に数多く引用されており、小徐注に於いては『爾雅』の経文と郭璞注が区別なく一体となった引用が非常に多い。この郭璞注の扱いが『爾雅』引用の最大の特徴であり、それは小徐の郭璞注に対する高い評価を反映した結果である。小徐が郭璞注を重視していたことは、郭璞注に特有の用字についても注を施していることや、郭璞注を引用する際の呼称などから明らかである。しかし、このような引用方法が、清代になり多くの批判を受けるようになった最大の原因でもある。小徐注には、このような一見不正確な引用がある反面、『爾雅』を詳細に検討していたことを示す注が多くあることは注目すべきもう一つの特徴である。

第三章では、経書の引用について考察する際の重要な論点の一つである許叙「其偁易孟氏、書孔氏、詩毛氏、礼周官、春秋左氏、論語、孝経、皆古文也」の解釈について「礼周官」を中心に考察し、併せて「礼」引用の特徴についても考察した。

まず、許叙の解釈について、段注では、「易は孟氏」・「書は孔氏」・「詩は毛氏」・「春秋は左氏」のように宗とするものを併記したものと「論語」・「孝経」のように名のみを記したものがあるとし、「礼周官」は名のみを記したもので「礼(儀礼)」と「周官(周礼)」を併記したのだと解釈している。これに対し、小徐注に於いて「礼」に関する引用中『周礼』及び『周礼』注の引用が圧倒的多数を占めているなどの点から、小徐は許慎が『礼』に於いては「周礼」を宗としていたと考えており、他の「易、孟氏」などと同様に、「礼周官」を「礼は周官」と解釈していたと考えられる。また、「礼」の引用については、礼学に於いて許慎は『周礼』を宗としているという認識にもかかわらず、小徐自身が「礼」と称するものは『周礼』ではなく『礼記』である；「礼」に関して引用の際の呼称は統一されておらず、「礼」と称するものと「礼記」と称するものに意味のある違いはないなど、その引用の際の呼称に大きな特徴があることが明らかになった。

第四章では、主として段注との比較を通して小徐本中の『書』の引用について考察し、併せて小徐注に用いられる「書伝」の意味を考察した。

説解に引用がある場合、段注ではほぼ全ての条に於いて引用に対して何らかの注が施されているのに対し、小徐本ではその引用に対する注となる引用は半数以下である。また、段注は『書』そのものの問題や、広く古典籍の解釈・用字などに関わる問題にまで論が及んでいるのに対して、小徐注は、1)出典に関する注がほとんどない；2)説解中に引用がある場合には、引用文と今本の異同や仮借用法など直接文字に関わる問題に主たる関心が向けられる；3)注のみに『書』を引用する場合には、字形と字義の関りを説いたり用例を挙げて説解を補足説明したりするなど、専ら説解を理解するための注となっていることが、その特徴として挙げられる。この相違は、段氏が文字の学を経学をはじめとする全ての古典研究の基礎とする立場に立つのに対して、小徐は『説文』を経とする立場に立つという、両者の基本的な姿勢の違いを反映しているのでは

ないかと考えられる。このほか、小徐注に於ける『書』の引用の特徴としては、書の注釈を引用することが極めて少ないことが挙げられる。このことは注釈を引用する際に多くの呼称のパターンがあることと併せて、偽孔伝に対する小徐の評価を示すものである可能性がある。

また、小徐が『書』の経文及び注釈を引用する際には、基本的に「尚書」と称していること、及び小徐が影響を受けたと考えられる書物に於ける「書伝」の用法の調査から、小徐注に用いられる「書伝」は、『尚書』の注釈を意味せず、その大部分が書籍全般を意味することがわかる。ただし、一部に「経書に対する伝」を意味する用法が含まれていると考えられる点は、注意すべきである。

第五章では、『易』の引用について検討した。小徐注に於ける『易』の引用の最大の特徴は、その注釈を引用することが極めて少ないことである。そして、それは『易』の構成、つまり「経」と十翼と総称される「伝」に対する小徐の認識の反映だと考えられることを指摘した。また、説解中の『易』の引用に対して、小徐が注中で言及することが非常に少ないこともその特徴の一つである。また、引用時の呼称に関しては、「易」と称する場合と「周易」と称する場合があるが、その使い分けには明確な基準がなく統一性はない。

第六章では、『論語』の引用を中心に、孔子の言葉を引用するものも併せて考察した。『論語』の引用で最も特徴的であるのは、その注釈を引用しないことであり、それは「孔子曰」として引用された『論語』についても同様である。その原因は、『論語』が孔子一門の言行録であり、経文そのものに字義・字形などの解説になり得るものが含まれているという特性に基づくものであると考えられる。また「孔子曰」として引用されるものの特徴としては、他の経書では用例を含めた字義の説明のために引用されることが最も多いのに対して、説解で「孔子曰」として引用されるのは、字形を説くことを目的としたものがその半数を占め、小徐注もそれに準じる傾向にあることが挙げられる。

第七章では、『詩』の引用について考察した。『詩』の引用では、説解中に引用される『詩』について、関連する注がつけられているものが極めて少ないことがその特徴の一つである。そのうち半数以上が「今本」との異同に関わるものであることは、小徐が説解の引用と今本との異同に対して極めて高い関心を持っていたことの表れだと考えられる。また、小徐が『詩』注を引用することが極めて少ないこと、『詩』注の引用に際してその呼称がさまざまであること、及びそのことが出典の多様性を示す可能性を含んでいること、小徐が『詩』の言を『爾雅』を以って釈そうとする傾向が強いことなどは、小徐の毛伝に対する評価があまり高くなかった可能性を示している。そのほか、小徐が三家詩など『詩』の系統の違いにほとんど言及しないことは、段注と大きく異なる小徐注の特徴の一つである。

第八章では、『春秋』の引用について考察した。説解・小徐注ともに『左伝』に基づ

いており、『公羊伝』・『穀梁伝』からの引用の場合は、『左伝』からの引用と区別するため「春秋公羊伝」・「春秋穀梁伝」のように明示している。しかし『左伝』の引用に於いては、説解では「春秋伝」・「春秋」と称するのに対し、小徐注では「春秋伝」・「春秋」という呼称を用いることは少なく「春秋左伝」と称するものが大多数を占める点が異なる。また、小徐注では、字形 — 特に用字 — に関わる説明のために引用されるものの割合が比較的多いことがその特徴の一つとなっている。『春秋』の注釈に関しては、小徐はその注に於いて杜預の地名の考証に非常に高い評価を与えている半面、杜預の注釈の引用数は極めて少なく、その半数以上が地名の考証に関わるものとなっている。このことは、『爾雅』郭璞注とは異なり、杜預の注釈は、その地名考証のみが評価されていることを示していると考えられる。

このほか『春秋』の引用に関しては、小徐注で「春秋(伝)」と称されるものの約半数が巻十二に集中している；数少ない『春秋』の注釈の引用のうち、半数以上が巻十二に集中している；杜預注の評価に言及する「酆」の条などが巻十二にあるなど、巻十二の特殊性が際立っており、巻十二はまだ注釈スタイルが固まっていないかなり早い段階で書かれたものであったという可能性も考えられる。また、『春秋』の引用全体は、ほかの諸経の引用と微妙にずれがあり、それが小徐の学問体系に於いて『春秋』学が特別な位置を占めていた可能性を示唆しているとも考えられる。

第九章では、小学類の引用について考察した。小学類の書で小徐の注釈にまとまった数の引用があるのは、『爾雅』・『字書』・『釈名』のみであり、これらは主として字義の補足として引用され具体的なものの名を説くために用いられている。『爾雅』及びその郭璞注を中心に据え、『字書』・『釈名』はそれを補うものとして用いられていたと考えられる。更に、小学類の書のうち小徐が『説文』学の衰退を招いたとする『玉篇』・『切韻』以降の書の引用がないことを考慮すると、小徐注に引用される「字書」は『玉篇』・『切韻』以前に由来を持つ『字書』であると考えられる。

『字書』については資料が少なく作られた時代・作者及び伝承の過程も不明で、小徐の『字書』に対する評価を探る手がかりも少ないため、『字書』としばしば共起する「今」・「俗」の用法を考察の手掛かりとした。小徐注に於いて字形に関する言及では「今」・「俗」ともに本来の姿からずれが生じているという負の評価を伴うことが多くなるが、規範とのずれを意識した時、より多く用いられるのは「俗」ではなくむしろ「今」である。『字書』の引用では、書名の前に「今」を伴う割合がほかの経書に比べ高く、「今字書或作」のような表現が散見されることは、作者も成立年代も伝承の過程も明確ではない『字書』のテクストに対する信頼度が低かったことの表れとも考えられる。

第十章では、個別の書物の引用についての考察に基づき、引用の目的・呼称・経書注釈の扱いを中心に、小徐の注釈の特徴を論じた。

引用の目的については、出典に関する注がほとんどない；説解中に引用がある場合には、引用文と今本の異同や仮借用法など直接文字に関わる問題に主たる関心が向け

らる；注のみに『書』を引用する場合には、字形と字義の関りを説いたり用例を挙げて説解を補足説明したりするなど、専ら説解を理解するための注となっていることが、その特徴として挙げられる。引用の際の呼称について注目すべきことは、1)例えば、小徐が『爾雅』郭璞注を重視していることは、引用の際に「郭璞曰」とのみ称することが多いことに反映されているように、小徐の当該書に対する評価を反映する場合があること；2)許叙の「礼周官」を小徐は「礼は周官」と解しており、許慎は礼学では『周礼』を宗とすると考えているが、小徐注に於いて「礼」と称するものの大部分が『礼記』からの引用であるように、小徐がその注釈に於いて、説解中の呼称をそのまま引き継いでいるとは限らないことの２点である。経書注釈の扱いについては、対象とする経書によって小徐の扱いに大きな差があり、それは主として引用数の差という形で表れている。引用される割合が最も高いのは、『爾雅』郭璞注であり、それに次ぐ『礼』（『周礼』）鄭玄注・『春秋』杜預注は、引用数や言及の仕方などから、程度の差はあるものの一定の評価を得ていると考えられる。しかし『易』・『書』・『詩』・『論語』の注釈は、高く評価されているとは言い難いことがわかる。

なお、注釈に対する評価とは関係なくほぼ全ての経書の引用に、経文と注釈を一体化して引用、あるいは長い経文・注の意を取り簡略化して引用する例が見られる。小徐が「経」とする許慎の説解の中にも、意を取り「檃栝」して引用している例がかなりある。このような許慎の引用の仕方は、当然小徐に何らかの影響を及ぼしていると考えられる。説解の意味をより明確にするために書物を引用するのであるから、忠実な引用よりも、目的にふさわしい形で引用することを重視した結果が、小徐注には意を取り適切な形に改めた引用が多数含まれるという形で表れているとも考えられる。引用の中には、記憶違いによる誤りが全くないわけではないが、清代の学者が批判したような「典拠に依らない引用」などでは決してないことは明らかである。小徐と清代の学者の引用に対する考え方は大きく異なる。引用に於いて重要なことは、小徐にとっては引用に依り説解をより明確に解き明かすことにあり、必ずしも原文に忠実に引用することにはない。

（論文審査の結果の要旨）

後漢に許慎により編まれた『説文解字』は、現在まで1900年以上にわたって、中国における最も重要な漢字字書であり、多くの注釈書が著されてきた。とくに、10世紀後期は、南唐の滅亡後に北宋に仕えた徐鉉の『説文解字』校訂本、そして南唐の人として一生を終えた徐鍇『説文解字繫伝』（以下、『繫伝』）四十巻という兄弟の研究成果が出現し、以後の『説文解字』研究の基礎をかたちづくった時代である。なかでも弟の徐鍇の『繫伝』は、歴代の『説文解字』注釈の中で最も古く、体系性をそなえ、かつ豊富な文献を引用するものとして知られる。ただ、18～19世紀にかけて清朝の考証学者たちの手により数々の卓越した『説文解字』研究文献が著されたことで、『繫伝』自体への関心は相対的に低下してしまう。現在残る『繫伝』の版本は、誤りを含んだ読みにくいものであるにもかかわらず、信頼すべき校訂版さえもいまだ出現していない。しかし、『繫伝』は、『説文解字』の一注釈という枠を超え、唐末から五代にかけての江南地域の学術を理解するために重要な意義をもつ文献であり、本格的な研究の出現がまたれていた。

本論は、そうした『繫伝』にかかわる研究の現状を補うものとして、大きな意義を有する。論者は『繫伝』のうち「通釈」の二十七巻を綿密に通読し、引用される文献中で最も重要な『易』・『書』・『詩』・礼・『春秋』および『論語』・『爾雅』・字書のすべての条を抽出して、それぞれの引用回数を調査し、その数字がどのような意味をもつかを検討し、典籍ごとの引用形式の類型を帰納した。さらにその個々の類型から代表的な事例を示し、徐鍇がいかなる判断のもとに当該の引用形式を選んだかを誠実な態度で論じている。その際、被引用資料の字句と現在通行する版本との異同も具体的に示され、『繫伝』の誤りだと考えられる場合はその原因まで分析がなされた。徐鍇が『繫伝』編纂にあたって利用した原典資料は、もちろん唐五代の江南系写本であり、引用された字句と現存典籍に異同がある場合、いまでは失われた系統の本文が含まれている可能性は否定できない。また、経書ごとの引用態度に明らかな違いが認められ、たとえば『春秋』学についてはやや特異であるなど、論者の検討によって示された諸点は、将来の『繫伝』校訂のために重要な基礎だと言わねばならない。

論者のいまひとつの貢献は、『繫伝』が本文中で使用した術語について逐一検討を加え、徐鍇が既往の学術をいかに継承しているかを示したことである。たとえば、「書伝」という語の用法は、論者による詳しい考証の結果、「『書』の伝（注釈）」ではなく書籍一般をさすものだということが明らかになり、そこからさらに唐の孔穎達らの用語が徐鍇に影響を及ぼした可能性まで示された。あるいは『繫伝』全体に頻出する「字書」が普通名詞ではなく書名『字書』であること、字体の「俗」に徐鍇の段階ではまだ否定的な評価が含まれていないこと、こうした点も、唐代までの注釈文献の用語例、時代ごとの語義変化過程を丹念に追跡することで論じられている。きわめて地味な手間をかけた作業であり、これによって徐鍇の学問がどのような特質を有し、いかなる点

で唐代の著述態度を継承しどこを改めたかを、客観的な証拠とともに示すことができた功績は大きい。

個別の典籍の引用の検討から始まった論者の検討は、さらに経書一般がどのようにあつかわれたかの総合的考察へとすすむ。とくに、清朝考証学を代表する段玉裁『説文解字注』と『繫伝』との注釈態度を対照することを通じて、徐鍇が『説文解字』本文そのものの説明に努力を集中しているのと異なり、段玉裁は広く中国古典学一般の基礎を構築しようとしていたという差が、例をともなって説明される。南唐と清朝との文献学が、800年の時を隔てて、質的にどのような差異をもつに至っていたかを説得的に示した論述だと言えよう。

本論には、なお惜しまれる点がないではない。論者は、『繫伝』の原典引用を検討するにあたって非常に厳密な態度をとり、対照に用いるテクストを、宋代刊本の系統を引く、相対的に全体が均質なものに限定した。そのため、唐写本・日本写本のような、全体の一部しか残っていない資料を意図的に避けている。ただ、前述のように『繫伝』が唐五代江南系写本に依拠して編まれた著作である以上、古写本の活用にもう少し積極的であってもよかったかも知れないと惜しまれる。また、研究対象とした『繫伝』のうち、「通釈」を除く最後の通論的な十巻についても、論者はすでに調査を終えており、経部の書の引用回数について数字を具体的にあげているが、分析の慎重を期してまだ具体的な論述を展開していない。「通釈」部分と通論的部分において徐鍇の著述態度が異なるのかどうかは、興味が持たれる問題なので、ぜひ補われるよう期待する。

もちろん、上にあげたような点は、論者の引き続いての研究によって解決されるはずのものである。本論によって、これまで充分な評価をされてこなかった『繫伝』の注釈の性質、徐鍇の編纂態度が明らかになり、南唐の学問の特質を探るためのひとつの基礎が与えられたことは、今後の『説文解字』研究にとってたいへん喜ぶべきことである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年7月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。